

(研究ノート)

# ハーマン・メルヴィルの太平洋表象批評

大 島 由 起 子\*

## 0. 序

今日、アメリカ人作家ハーマン・メルヴィル (Herman Melville 1819-1891 年) のコスモポリタニズムについて論じられることが多い。メルヴィル批評の主流のひとつに植民地批評がある (Paryz 17)。メルヴィルは、ポリネシア体験と捕鯨体験ゆえに、当時の他作家とは大いに違う文明観を抱いたというのが主流であり、筆者も概ね同感である。しかし同時にまた、これとは対立する批評の系譜もある。本稿では、メルヴィルの世界主義の起点として若き日の太平洋体験を概観し、メルヴィル作品をめぐるポストコロニアル論争ともいえるべきものについて検討する。

## 1. 伝記

### 1.1 平水夫時代

まず、メルヴィルの伝記を瞥見しておきたい。

メルヴィルは名家に生まれたが、社会の底辺に身を置くことになった。彼は、父母双方が独立戦争で活躍している祖先を持ち、裕福な子供時代を送ったが、

---

\* 福岡大学人文学部教授

父の破産と狂死の後、職を転々とする事になり、果ては、捕鯨船に平水夫として乗り込んだ。この凋落度合いは、アメリカン・ルネッサンス期といわれる同時代の作家の中でも際立っている。

メルヴィルは計五隻の船に乗ったが、そのうち三隻が捕鯨船であった。質的にも、捕鯨船の意義は大きい。当時、最悪の職場ともいえる捕鯨船に乗るなどということは、いかにメルヴィルが身を持って余すようにして、いっそ落ちるところまで落ちてやれとばかりに自暴自棄になったかを物語るといえる。というのも、当時の捕鯨船といえば、メルヴィルが代表作『白鯨』(Moby-Dick)で書いているとおりであって、様々な種類の船の中でも最も過酷な重労働を強い職場であり、特にメルヴィルのような平水夫は搾取された。そのこともあって、メルヴィルをはじめ脱走水夫が後を絶たなかった。捕鯨船では水夫の柄も悪く、メルヴィルも途中から乗ったが、とくにオーストラリアの捕鯨船は元四人がほとんどだったというから、すさまじい。人種面でいえば、捕鯨船は、他の種類の船からは締め出されたような、黒人や先住民にも大きく門戸を開いていたから、非常に人種混淆であった。

メルヴィルは、船での待遇が気に入らず、一人の友人と脱走をして、ポリネシアのある溪谷で暮らし、別の捕鯨船に救出されてタヒチ島に行き、タヒチでは反乱ゆえに「入牢」も経験し、その後、また別の捕鯨船に乗りハワイに渡ると、脱走水夫として不法就労で暮らした。が、さすがに嫌気がさし望郷の念にも駆られたからか、米海軍の懷に飛び込む形で巡航艦の水兵になり、一八四四年に帰郷し、四年近くの漂泊に終止符を打ったのだった。

少し詳しく見ておく。メルヴィルは、第一作『タイピー』(Typee)の主人公のように、ポリネシアのマルケサス諸島の端に位置するヌクヒヴァ島で、捕鯨船から脱走して、あまりに植物の繁茂に迷い、そうするうちに、避けていたはずの食人種だという噂のあるタイピー族の村落に迷い込んでしまった。メルヴィルが島を訪れた時にはフランス軍艦三隻がヌクヒヴァ湾に停泊中であつた

が、まだフランスは「獐猛」だという噂のあるタイピー族の部落には入り込んでいない段、つまり植民地時代に突入する直前であった。

入り込んでみると、タイピー族はその理由は定かではないがメルヴィルたちを手厚くもてなし、メルヴィルはタイピー溪谷をこの世の楽園とまで感じるようになる。その理由には普遍的なものもあるだろうが、大きくふたつ、次のような特殊事情もあずかっていたと思われる。

ひとつには、金銭である。メルヴィルは、裕福な家庭に生まれながら、一八三二年の父の破産によって職を転々とする羽目になり、金銭面での苦勞が絶えなかった。そうしたメルヴィルとしてみれば、タイピー溪谷という金銭なき世界が非常に強烈な魅力的であったことは、想像に難くない。ポリネシアでは、気候ゆえに食物の繁茂もあり、食べ物が容易に手に入るという意味でも楽園だったろう。

メルヴィルにとってのいまひとつのタイピー溪谷の魅力の理由は、性であつたろう。メルヴィルは、とくに父亡き後には、カルヴィン主義の厳格な母が君臨してピューリタンの道徳を説く家庭出身なので、南海での奔放な性のあり方には衝撃を受けたに相違ない。また、それは彼には魅力的に映つたであろう。『タイピー』の女性主人公であるタイピー族のファイアウェイの描写を読んで、メルヴィルが南海の女性に対して嫌悪感を覚えたなどと解釈することはおよそ不可能である。彼女は、唇と肩に刺青があり、魚を生で丸呑みするとはいえ、一見否定的と見えるこうした描写も異国情緒あふれる魅力という風に描写されている。この性的な魅力は、本稿後半で扱うポストコロニアル論争とも絡む事柄である。

メルヴィルは、いったんは「この世の楽園」とまでみなしたはずのタイピー溪谷から到着後四週間後には、命がけで脱出をした。

## 1.2 捕鯨体験と捕囚体験の意義

まずコスモポリタニズムとの関連でメルヴィルの捕鯨体験の意義を考えてみたい。

ハワイから帰国したメルヴィルはミドルクラスに戻ることになる。家族などにタイピー溪谷などの冒険を話すと小説にするように勧められて、『タイピー』を書いてみると一夜にしてベストセラー作家となった。しかもマサチューセッツ州最高判事の令嬢エリザベスとの結婚により、社会の上部に戻ることになる。

補遺として述べれば、ジェームズ・アクステルなどの歴史家がさかんに主張するように、人種関係も、他の人間関係同様に双方向的であり、先住民と白人の関係も例外ではない。郷に入っては郷に従えという現地で暮らしてみても初めてわかる現地人の優越などは、至極当然のことだと思われるが、十九世紀の白人はそうは考えておらず、彼らは人種についても歴史についても一方的に評価を下しては、疑似科学的に活字にしていた。

方や、メルヴィルは人種観の双方向性を身をもって知っていた。タイピー族の中にあっては、平水夫で新参者のメルヴィルは最低の位置にいたのだから、彼には他作家にはおよそ想像しえなかった、実力で生きていく異人種共存の職場を見たことになる。しかも当時の捕鯨船は、水などの補給以外には寄港もせず三～四年の航海をしたので、水夫たちは他の種類の船よりも長期にわたって親密空間に身を置き、かつ、同じ釜の飯を食べて生死を共にした運命共同であった。同乗仲間との交流や観察だけでなく、捕鯨船がよその船と海上でであった時の情報交換などの接触をとおしても、メルヴィルはつぶさに様々な人種を観察した。そして、おそらくは、つまるところ有色人種水夫ひとりひとりの顔が見え、個々人が各々の人格を持つ人間であるという至極当然のことを、驚きを持って学んでいったのであろう。想像すれば、それは身をもってなどという生易しいものではなく、メルヴィルはタイピー溪谷では、食人種に生殺与奪の権限まで握られていたし、フランスやアメリカが攻撃をしてくれば、巻き込ま

れて殺されても不思議ではない立場であった。また、共にタイピー溪谷に行った白人の友人がいなくなっていたので、メルヴィルはタイピー溪谷でのほとんどの時間を、唯一の白人として相談相手もなく暮らしたのだった。

このようにメルヴィルにとって人種関係とは、一方的に白人が優越であったわけではない。そのことを初期の自伝的小説で確認するならば、『タイピー』では、白人主人公トンモ（メルヴィル）には、タイピー族が自分を歓待し続ける理由がわからないなりに、人食が目的ではないかと勘ぐる。この事態を客観的に眺め直せば、タイピー族の生来の、よそものに対する歓待の習慣が主因であったろう。また、タイピー族の指導者たちにとってみれば、アメリカ人デイヴィッド・ポーター提督に村を焼かれた経験があったので、いざ白人が再度攻めてくれば、トンモを通訳か捕虜として交渉に使いたかったからであっただろう。何しろ当時は、あたりには食べ物は海にも陸の緑にも豊富な土地柄だったので、タイピー族にとってトンモを客人として遇して、彼に食べさせることには何の痛痒もなかったはずであった。白人トンモは白人ゆえに自動的に優越な立場にあるどころではなかった。たとえば、滑稽な場面がある。トンモがタイピー族の指導者に錆びた銃を直すようにと懇願されて、その銃があまりに錆付いているものだから修理できないでいると、タイピー族がトンモのことをレベルの低い白人と思う挿話がある。読者にしてみれば滑稽な挿話だが、部族の指導者たちにしてみれば、トンモの役立たなさに大層失望したことであろう。また、トンモは、タイピー族が食人種かもしれないと恐れ、そのことを楽園の汚点だと捉えていた。しかし人類学的観点では、食人といっても、タイピー族の場合、相手の強い戦士を斃してその肉を供することで強さを自らの心身にとりこむための儀式としてあったので、タイピー族が戦士でもなく強くも見えないトンモの肉をわざわざ食べるようなことは現実にはありえなかったはずである。足の怪我もあり、トンモはタイピー族に世話をされる、庇護されるような客人であった。

次作『オムー』(*Omoa*)でも、メルヴィルは同様の文化相対主義について書いている。たとえば、現地では、男性は色黒の方が良いとされているので、一般の白人男性は青白で女々しく見えるという(OM 129)。また白人は、タヒチの人が斃した敵の骨で釣り針を作るのをおぞましいと考えるが、スカンジナビアの白人は人の頭蓋骨でカップなどを作るのだ、タヒチ人を残虐だとするにあたらないと、語りは白人優越を脱構築する(OM 129)。

## 2. メルヴィルの太平洋表象批評史

メルヴィルは初期の三部作出版当時、読者から南海で楽しんだ男というイメージで受け止められていた。たとえば、『タイピー』がベストセラーになり、その続編『オムー』にメルヴィルのエリザベス・ショーとの結婚通知を載せるにあたって、『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』は、『タイピー』の女性主人公ファイアウェイに言及して、ポリネシアでメルヴィルに「捨てられた美女ファヤウェイは、メルヴィルを婚約不履行の罪で訴えるに違いない」とメルヴィルを揶揄した。まさにこのように、当時の人々はメルヴィルがポリネシアの女性と恋愛関係にあったと思っていたのである。

しかし、時代が下り、「政治的正しさ」が重視されるようになると、これとは対立する批評の系譜がむしろ主流となる。メルヴィル研究の例をみれば、たとえば、二〇〇三年にハワイで開催された第四回メルヴィル国際学会の成果として二〇〇七年に『海の彼方—メルヴィルと太平洋』(*Melville and the Pacific*)が出版されたが、その「太平洋について」のセクション所収の論文が注目に値する<sup>1)</sup>。いずれの論文も、メルヴィルというとポリネシアのことばかりに批評家は注目するが、メルヴィルが太平洋で最も長く留まった場所はハワイであった事実を強調して、ハワイの重要性を訴える。そして、メルヴィルのハ

ワイ表象の問題点を列挙していき、メルヴィルがコスモポリタンだという定説を覆す。そうした目的意識に貫かれている。たとえば、そのなかのカイウィ論は、メルヴィルがハワイ人を墮落した野蛮人だと書いたので、メルヴィルは自分が『タイピー』や『オムー』で批判した宣教師と変わらないほどハワイに害をもたらしたとして、メルヴィルを酷評している（Kaiwi 15）。

これに代表される昨今のメルヴィル批評を眺めれば、方やメルヴィルをコスモポリタンだとする系譜があり、方や、そうした定説を覆そうとする新たな動きがあり、ふたつがせめぎあう様相を呈している。後者については、次に見る、ひとつの「論争」に端を発するといえる。

## 2.1 ポストコロニアル論争

最も有名な議論は、ジェフリー・サンボーンとポール・ライオンズとの間で戦わされた、主としてメルヴィルの第一作『タイピー』をめぐる応酬で、ポストコロニアル論争ともいうべきものである。ここでは、この論争を中心に問題の所在を確かめることにしたい。

まずポリネシア人が、その食人種という紋切り型ゆえに十九世紀にどれほど白人に恐れられていたかという時代背景を抑えておかななくてはならない。メルヴィルの『白鯨』の最後では、白鯨がピーコッド号を沈没させるが、メルヴィルは作品の他の箇所でも、鯨が捕鯨船を沈没させることが現実にも可能であることを示した。エセックス号に言及して、怒った鯨の頭突きでエセックス号を沈没させた事例を示したのだ<sup>2)</sup>。

実在の捕鯨船エセックス号が巨大抹香鯨に沈没させられた後、救命ボートに乗った生存者は、餓死しかけていたにもかかわらずソサエティア일랜드群島に寄るのをよして無謀にも漂流を続け、拳句に、皮肉にも餓死しかけて仲間を食べる羽目になった。エセックス号船員の、このようなポリネシア忌避は、当時の白人がポリネシアをいかに食人と結び付けていたかを傍証する。

サンボーンは自身の一九九八年出版の批評書『食人の記号』で、ポストコロニアル批評の大御所ホミ・バーバに依拠しながら、食人、あるいはそう自己表象をするタイピー族のようなポリネシア人と、白人との相互関係を論じた。すなわち、白人は近代兵器で現地人を威嚇した一方、ポリネシア人側は、食人の恐怖を利用して白人に対して優位に立とうとした。そう指摘して、サンボーンは、『タイピー』で白人主人公トンモが、食人種だとされるタイピー族の食人現場を見たふりなどしない点が素晴らしいと称え、メルヴィルが珍奇なものを書く作家として、怖いもの見たさで窃視したがる読者に決して彼らが求めている食人の証拠を与えない徹底振りを讃えた。この批評書でサンボーンはメルヴィルを「電撃的ポストコロニアル作家 (electrifyingly postcolonial writer)」と激賞した (Sanborn [1998] 73, 79)。サンボーンを賞讃する批評家は多い (Paryz 17)。

ところが、サンボーンを名指しこそしなかったものの、ハワイ在住のポール・ライオンズは、二〇〇六年に出した批評書『アメリカン・パシフィズム』で、ポストコロニアル批評を使ってメルヴィルを批判した。「パシフィズム」とはライオンズの造語であり、アメリカ人が太平洋に抱くオリエンタリズムを指す。アメリカ人が太平洋を描く際に、現地の女性は白人男性に性的に誘いをかけ、現地の男性は白人を食するというような表象をするという見方である。

ライオンズは、一八一五から一八六五年頃にアメリカで盛んでありメルヴィルも使ったこうした食人というポリネシア表象がアメリカにおける太平洋表象の源となったという。そしてアメリカ人は、そうした紋切り型で作り出したこと、つまり現地人の誘惑やら、食人に代表される凶暴さを口実として、自分たち白人が現地で犯す罪を和らげた (pacify) のだと主張する。つまり食人表象によって、白人は、太平洋の島々で土地収奪や性的搾取といった罪を犯したが、いくら罪を犯しても、自分たちの無垢を失わずにすむようになったという。そ



してメルヴィルもリベラルなように見えて、しよせんアメリカ海軍の提督デイビッド・ディクソン・ポーターやチャールズ・ウィルクスといった航海者や、作家たちと同列であって、偏見に満ちた目で太平洋の島民を見ており、白人の植民地主義を正当化しているという (Lyons [2006]b 65)。

ライオンズはメルヴィルのこうした両義性について、「幾度も波で浜に戻されてしまうのにも似た」という卓抜な比喩を使いながらこう結論めいたことを述べた。

メルヴィルは、失樂園や、誤認と恐怖からくる傲慢さという文化衝突の基盤を強調し、自分には定まった戦略などなかったことや、また、欧米は、オセアニアで存在感を増すにつれて暴力的になったことを弾劾しているが、(中略)メルヴィルには、自分が、心ならずも欧米の暴力に加担していたという自覚もあった。『タイピー』からは、この齟齬から生じるメルヴィルの徒労感が伝わってくる。それは、いくら潮流に逆らって泳いでも、幾度も波で浜に戻されてしまうのにも似た徒労感だった。(Lyons [2006]a 96)

このようにライオンズは、たとえメルヴィルにコロニアリズムに加担してしまったかもしれないという暗澹たる気持ちがあったにしても、メルヴィルは自らの加害者性を正当化しようとしたと指摘して、メルヴィルとて他の白人たちと大同小異にすぎないと断じる (Lyons [2006]a 96)。そしてライオンズは、メルヴィルがタイピー族の食人が実際にあったと見聞きをしたことはないと言っていたと妻エリザベスが後年一九〇一年に言っていたのに (Leyda, I, 137)、批評家がそれを等閑視しているのはおかしいことだと述べ、批評家にも非難の矛先を向けている。こうしたライオンズによるメルヴィル批判は、無論メルヴィル学者全体に向けられたものであったが、メルヴィルの南太平洋におけるポス

トコロニアル批評の代表格はサンボーンであったので、実質的にはサンボーン批判ともとれるものであった。

サンボーンはその三年後の二〇〇九年に、国際メルヴィル学会の学会誌『レヴァイアサン』に、ライオンズ著『アメリカン・パシフィズム』についての書評を載せたが、その際に、ライオンズに応酬するかのように『アメリカン・パシフィズム』を酷評した。いわく、ライオンズの最大難点はエドガー・アラン・ポー、フェニモア・クーパー、ジャック・ロンドンなどの有名なアメリカ人作家の「俗悪なる」太平洋表象と、メルヴィルの複雑な太平洋表象とを一絡げにして論じていて、誤っている。そしてライオンズが『タイピー』の断片しか引用しておらず、しかも三十年来のメルヴィル批評を無視していると批判したというものだった (Sanborn [2009] 84)。この三十年来のメルヴィル批評史の中には、サンボーン自身の金字塔のごとき業績『食人の記号』も入っていることは勿論である。

この論争に筆者なりの評価を付すなら、筆者としてはサンボーンに軍配を上げたい。サンボーン論は、現地人が食人という白人が気にしている記号を利用している側面もあるという作用の双方向性のダイナミズムの指摘が素晴らしいからである。サンボーンという言葉の辛辣さには辟易する部分がないにしもあらずだが、肝心の内容に関して、サンボーンが書いた書評は、さすがに『食人の記号』を物した批評家ならではの大胆な発想、かつ精緻な分析だったと考える。そしてライオンズの視座については、ハワイでの、白人に抑圧されてきたことに反発するハワイ人としての文化復興の雰囲気と大いに関連するという時代背景もわれわれは考慮に入れるべきであろう。そうした現地の視点から、ただ見られる存在ではなく、今度は現地人が白人を見て、これまで白人によってなされてきた太平洋表象を批判する時代になっている。

## 2.2 性的帝国主義

一般的に太平洋諸島は、当時の白人男性にとっては、不道德だという罪悪感をもたずに現地女性に対して好きなように性的関係を楽しんでよい、平たく言えばセックスの楽園であった（Edmond 99, Keown 42-43）。画家ではポール・ゴーギャンが、作家ではピエール・ロティ、ジョン・ホークスワース、ロバート・L・B・ステイブンソンが有名である。文化人類学者マーガレット・ミードによれば、メルヴィル著『タイピー』やロティ著『ロティの結婚』、ゴーギャンの自伝的随想『ノアノア』では、白人男性は自分たちに対して「喜んで身を投げ出す」まだ思春期も過ぎていない少女と性的関係を持つので、こうした作品はポリネシアやサモアの少女は性的に早熟かつ奔放だというイメージを確固たるものにした（Keown 47-48）。

批評家グリーンバーグは、メルヴィルが太平洋にいた時期のアメリカといえば、キューバやメキシコに対してと同様にサンドイッチ諸島へも拡張欲を露にしていた時代背景を踏まえ、そうした反映するかのようメルヴィルはタイピー族の少女ファヤウエイを優美かつ淫らと表して男性読者の欲望を掻き立てたので、メルヴィルもまた時代の女性表象を固定化させたと批判する（Greenberg 18, 24-30）。

『タイピー』の最後近くでは、主人公トンモがタイピー族から逃れようとする、手に汗握る場面がある。そこにハワイ人が三人現れてタイピー族と交渉して、銃や布と交換によって何とかトンモを解放しようとする。作品ではそれまでハワイのことが描かれていなかったのも、このようなハワイ人の介入は唐突の感を否めないし、白人主人公トンモは恋人ファヤウエイを捨ててタイピー族の男性モウ＝モウを殺すので、トンモも作品が批判する獰猛なる白人にすぎないという批評もある（Avallone 43）。たしかに、そうした批判を呼び込む違和感が『タイピー』の最終部にはあると筆者も考える。

先述のように一九九八年出版の批評書でメルヴィルを「電撃的ポストコロニ

アル作家」だと激賞したサンボーンだったが、後には手放しの礼賛はよすようになり、メルヴィルは一般白人たちよりは遙かにましだったがメルヴィルとて時代の人であり、気楽に太平洋を搾取した点、他の白人表現者たちと共犯的だと結論した (Sanborn [2006] 371)。

サンボーンは、『タイピー』や次作『オムー』の終わり方も問題視するようになり、いずれの小説でも、最後で帰郷していく白人主人公の前に広がるのは空っぽで空白な海であることを捉えて、メルヴィルが『タイピー』や『オムー』で、「自由で気楽な太平洋」(OM 235) というイメージを打ち出すのみだという。『オムー』でオムーという名の主人公は、相変わらず気楽に現地の者を搾取して回り、ひとしきりそれが終わるとまた気楽に去っていき元の放浪者に戻るだけだと批判している (Sanborn [2006] 371-72)。

『タイピー』(一八四六年)や『オムー』(一八四七年)の出版時期はアメリカ拡張期に当たる。北米大陸では、一八四八年がメキシコと交わしたグアダルーペ・イダルゴ条約である。一八五一年の一般教書で、ミラード・フィルモア大統領は、いまにアメリカとアジアとの間で大規模の貿易が始まるだろうが、ハワイ諸島はその中間に存在することを指摘していたし、アメリカの大衆向けの出版物にも、〈マニフェスト・デステイニー〉がひたすら西へハワイを目指していた頃であった (Greenberg 21)。

遡って一八一三年に『タイピー』の舞台となったマルケサス諸島のヌクヒヴァ島がアメリカのものだとした米海軍提督デイヴィッド・ポーターによる宣言は、アメリカにとって国外で初の帝国主義的企てであった (Rowe 83)。ポーターはヌクヒヴァ島では、ハッパ族やタイピー族と戦って村落を焼いただけで、島の占有にこそ失敗したが、彼の試みは後のハワイ併合にもつながるアメリカの太平洋戦略を予告するものであった。チャールズ・ウィルクス提督の五巻の公式な『アメリカ合衆国探検遠征隊の記録』(1844年)が出たのは、『タイピー』出版のわずか三年前であった。ウィルクスは島民が食人種であるかどうか

かに拘泥し、新しい島を訪れる度にその点について記載している。白人による暴力を正当化するには、現地人を蛮人表象するのが便利だった。ライオンズは、トンモがタイピー族から逃げる場面で、タイピー族が食人種であることをメルヴィルが先制攻撃の口実に行っていると批判している (Lyons [2006]a 77)。このあたりからは、政治的に必要があれば、事実に行先して食人種の観念を作り出して利用することも容易であったことがわかる。『白鯨』でポリネシア出身のクイクエッグが食人種という設定で頭蓋骨行商をするが、これも、ウィルクスの航海記に想を得ているかもしれない。ピーコック号の記録では、炙って間もない敵の頭蓋骨を布と交易しようとするナロア湾でのフィジー人が書かれているし、しかもその頭蓋骨が食人の結果であると仄めかしているのだから (Wilkes qtd. Lyons [2006]a 83)。このことについてライオンズは、現地人が、白人が食人に過度の興味をもっているのを知っていたからだと推測し、さらに、実際に目撃されたのは現地人が人間の眼球だというものをつまみ食っていたとされる一場面にすぎないというように、メルヴィル作品で食人は人類学的、つまり科学的証拠としては提示されてなどおらず、ただの物語だというわけである (Lyons [2006]a 84-85)。

### 3. まとめ

以上、メルヴィルの南太平洋表象についての批評史を概観し、メルヴィルの再定位を試みた。

見てきたように、メルヴィルは若くて多感な時期に、外国人や異人種の船員との遭遇や、諸国への寄港から、見聞を広めたことになり、国や地域また人種、民族によって価値観も多様であることを当然のこととしてわきまえていったのであろう。そのため、何を善として何を悪とするかも、その地域や文化次第、

いな、個人次第だとする相対主義的な見方が培われたと考えられる。

メルヴィルの『タイピー』や『オムー』で描かれた食人表象および性的帝国主義は、時代の空気でもあったアメリカの領土拡張と無関係とはいえない。ポストコロニアル批評が盛んになると、論争対象となるにふさわしい諸作品をメルヴィルは書いていたことになる。

## 注

1. すなわち、モニカ・A・カイミポノ・カイウィ、エイミ・グリーンパーク、シャーロン・アヴァロン、エマニュエル・J・ドレッチュセル、そしてポール・ライアンズ著の論文である。
2. この事件を扱ったオーエン・チェイス著のノンフィクション『物語—エセックス号の沈没』(*Narrative: Wreck of the Essex* 一八二一年)は、事実は小説よりも奇なりという本であり、当時広く読まれ、翻訳もされた。

## 文献

- Avallone, Charlene. "Depraved. and Vicious'/ Urbane and Domestic: Herman Melville, Elizabeth Sanders, and Traditions of Figuring Hawaiians." *Whole Oceans Away: Melville and the Pacific*. Jill Barnum, Wyn Kelley, and Christopher Sten. Eds. Kent, OH: Kent State UP, 2007. 31–48.
- Axtell, James. *The European and the Indian: Essays in the Ethnohistory of Colonial North America*. New York: Oxford UP, 1981.
- \_\_\_\_\_. *The Invasion Within: The Contest of Cultures in Colonial North America*. New York: Oxford UP, 1985.
- \_\_\_\_\_. *Natives and Newcomers: The Cultural Origins of North America*. New York: Oxford UP, 2001.

- Drechsel, Emanuel J. "Sociolinguistic–Ethnohistorical Observations on Pidgin English in *Typee* and *Omoa*." *Whole Oceans Away*: *Melville and the Pacific*. Jill Barnum, Wyn Kelley, and Christopher Sten. Eds. Kent, OH : Kent State UP, 2007. 49–62.
- Edmond, Rod. *Representing the South Pacific : Colonial Discourse from Cook to Gauguin*. Cambridge : Cambridge UP, 1997.
- Greenberg, Amy S. "Fayaway and Her Sisters : Gender, Popular Literature, and Manifest Destiny in the Pacific, 1848–1860." *Whole Oceans Away*: *Melville and the Pacific*. Jill Barnum, Wyn Kelley, and Christopher Sten. Eds. Kent, OH : Kent State UP, 2007. 17–30.
- Kaiwi, Monica A. Ka'imipono. "*Typee* : Melville's 'Contribution' to the Well-Being of Native Hawaiians" in *Whole Oceans Away*: *Melville and the Pacific*. Jill Barnum, Wyn Kelley, and Christopher Sten. Eds. Kent, OH : Kent State UP, 2007. 3–16.
- Keown, Michelle. *Postcolonial Pacific Writing : Representations of the Body*. London and New York : Routledge, 2005.
- Leyda, Jay. *The Melville Log : A Documentary Life of Herman Melville 1819–1891*. New York : Gordian P. 1969.
- Lyons, Paul. *American Pacificism : Oceania in the U.S. Imagination*. New York : Routledge, 2006.
- . "Global Melville." Wyn Kelley Ed. *A Companion to Herman Melville*. Malden, MA : Blackwell, 2006. 52–67.
- Melville, Herman.
- . Douglas Robillard. (Ed.) *John Marr and Other Sailors with Some Sea-Pieces by Herman Melville : A Facsimile Edition*. Kent, Ohio : The Kent State UP, 2006.
- . *Journals*. Eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle. Evanston, IL : Northwestern UP and the Newberry Library, 1989.
- . *Moby-Dick : or, the Whale*. Vol. 6 of *The Writings of Herman Melville*. Evanston, IL : Northwestern UP and the Newberry Library, 1988.
- . *Omoa ; A Narrative of Adventures in the South Seas*. Ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle Evanston, IL : Northwestern UP, 1968.
- . *Typee : A Peep at Polynesian Life*. Harrison Hayford, Hershel Parker,

- G. Thomas Tanselle Eds. Evanston, IL: Northwestern UP and the Newberry Library, 1968.
- Paryz, Marek. *The Postcolonial and Imperial Experience in American Transcendentalism*. New York. Palgrave, 2012.
- Rowe, John Carlos. *Literary Culture and US Imperialism : From the Revolution to World War II*. Oxford : Oxford UP, 2000.
- Sanborn, Geoffrey. "The Motive for Metaphor : *Typee*, *Omoo*, and *Mardi*" in Kelley, Wyn Ed. *A Companion to Herman Melville*. Malden, MA, Blackwell, 2006. 365 – 77.
- . "Paul Lyons, *American Pacificism : Oceania in the U.S. Imagination*." *Leviathan : A Journal of Melville Studies*. Vol. 11, No. 2, 2009. 82 – 85.
- . *The Sign of the Cannibal : Melville and the Making of a Postcolonial Reader*. Durham and London : Duke UP, 1998.